

日本胸部外科学会 NEWSLETTER JUST NOW JATS

No.61 (2021年3月号)

第 15 回日本胸部外科女性医師の会開催報告

兵庫医科大学病院 心臓血管外科 山崎祥子

今回は海外留学経験のあるお二人の講師と、ディスカッサントのお二人にご協力いただきました。

お一人目は名古屋大学附属病院循環器学内科学講座講師、坂東泰子先生にご講演いただきました。坂東先生は、留学をキャリアの中でどのように生かすか、そこからどのように diversity の問題を考えていくかを中心にお話ししてくださいました。

留学は目標ではなく、将来のキャリアを見据えて、卒後 10 年でどう進むか、留学中のテーマが次の 10 年のキャリアの土台になるのが好ましいという明確なメッセージのもとに、ご自身のキャリア形成をご説明くださいました。坂東先生は海外留学のみでなく国内留学の経験もあり、研究テーマに必要な技術を得るために、当時在籍されていた三重大学から九州大学へ行かれています。この九州大学国内留学で得た技術と知識を使って三重大学で学位を取得されました。その後米国ボストン Tufts 大学に留学し、リサーチ論文を執筆、与えられた環境でできるだけのことを行った結果とのことでしたが、この時の研究で執筆した論文が日本循環器学会学会賞 CPIS 賞を受賞されました。結婚を機に名古屋へ移られ、現在の名古屋大学附属病院のスタッフとしてのキャリアに移行されました。坂東先生は diversity 推進にも力をいれておられ、日本は世界的にみても女性医師の割合が少ない事、循環器内科でも女性スタッフの割合は少なく、この問題を解決するためには Unconscious bias : 女性は無意識のうちに自分を underestimate してしまう、女性は上に逆らうな、という自信を持ってない素地があり、このバイアスを自分で意識してとっばらはないといけないというまず女性自身の意識改革が重要であるというお話しは非常に印象的でした。また、diversity を推進する側として、均等な機会を与えるのみでなく、機会が均等になるようにサポートする、という概念も提唱してくださいました。留学を組み込んだキャリアアップとキャリアアップの過程でご自分が与えられた機会を、今度は若手に還元していく立場としての、非常に有意義な話を伺えました。今後留学を考えている若手ディスカッサントの先生からも活発な質問や、また本学会会長の碓氷先生からのコメントもいただきました。

お二人目は関西医科大学心臓血管外科 講師岡田 隆之先生にご講演いただきました。岡田先生はマレーシア、ドイツと全く異なる文化の 2 箇所の国に心臓血管外科としての臨床留学をされています。最近では留学離れの傾向もあるようですが、岡田先生は若いうちから積極的に海外へ飛び出されており、大変貴重な臨床留学経験を公聴できました。

岡田先生はマレーシアのクアラルンプールにある国立循環器病センターに卒後 5 年目の時に最初の留学をされました。スライドからも伝わる大変立派な病院で、開胸経験もなくいきなりこの大病院へ留学したというのは驚きです。文化的な交流や、カンファレンスで多職種の方と話したり、国外からの高名な先

生方のライブ手術を見学したりと人との交流を大切にされたということを強調されていました。その後、いったん日本に戻ったのちにドイツのハイデルベルグにやはり臨床の留学をされました。ドイツの心臓血管外科は日本から見ると非常にハイボリュームです。ドイツの臨床事情、留学中に学ばれた手術や設備、制度やしぐみについて語られ、異なる医療や文化から手術手技以外にも学ぶことが多かったというのが伝わってきました。2つの国、2つの施設へ臨床留学をされ、海外留学はキャリアアップになるという答えに確信をもたれているのも学ばれたことが多かったからと思われまます。Resilience の話をされていましたが、おそらくいろいろご苦労はあったと思いますが、ほとんど苦労を感じさせない話っぷりから、岡田先生の resilience の高さが垣間見られ、若い先生方に見習っていただきたいと感じました。スライドの合間にマレーシアやドイツのグルメ写真が織り交ぜられており、これも留学へのあこがれを掻き立てられる内容でした。

3人目は東邦大学佐倉病院心臓血管外科 准教授の齋藤綾先生にご講演いただきました。齋藤先生はカナダの London にある University of Western Ontario に臨床留学されました。移植の歴史の長い病院で、移植の場合は多職種からなるチーム医療となるため、transplant program から月2例ほどある心臓移植を学ばれ、通常手術の合間に緊急ではいつてくる移植に対応されていました。

心移植以外の手術も2チーム性のシステムでハイボリュームの手術をこなしていくカナダのシステムで、ライバルたちと症例を奪い合いながら、1年目の28例の執刀から2年目には98例まで執刀症例を増やされ、この1年の集中したトレーニングがあったので、現在の数に頼らない安定した手技が確立できたというのが印象的でした。おそらく2010年以前には日本ではほとんどされていなかった MICS や robot 手術にも、これはアシスタントとして学ばれたのも貴重な経験かと思われまます。

上記お二人の先生同様に齋藤先生も強調されたのは、人同士の交流の大切さです。留学中に得られた人脈は、現在でも糧だとのことでした。

齋藤先生は留学経験から、齋藤先生のキャリアアップの法則をさらに展開してくださいました。デフォルト思考から抜け出す、そもそもルールはないという発想で、逸脱を恐れず、ガイドラインが全てではないので、その都度の状況で選択していくことの大切さ、また他人と比べない、人がこうだから自分もというのではないという Diversity に基づいたキャリア形成を行う、さらに、自分の時間を大切にというメッセージも組み込んだ法則でご講演をしめくくられました。

最後は恒例の集合写真撮影を行いました。今回はオンラインのセッションだったため、写真撮影もオンラインという初めての試みとなりました。

末筆になりますが、これまでの活動にご理解、ご協力いただきました会員の皆様に感謝申し上げます。活動内容はホームページをご覧ください。



スクリーンショットでの写真撮影